

3.2 「書くこと」に関する主体的な取組およびパラグラフィティング指導の充実

高1の4月から高2の3月までの間、生徒たちは自主的な英語学習の記録を残していく「自学ノート」の取組を行ってきた。この取組では、生徒がノートを用意し、自由に英語の学習に取り組み、長期休業明けに定期的に、また、個人の英語学習の興味・関心、課題に応じて随時提出する。「ノートに書くこと」が取組の中心となるため、4技能のうち特にライティング能力の伸長につながると考えられる。以下にそのねらいや工夫などをまとめる。

<自律性とライティング能力を高める「自学ノート」の取組>

(1) 目的

英語学習における自律性を高め、生徒それぞれのニーズや目標、課題に応じて適切な学習方略を選択できるようにする。

(2) 支援の工夫や留意点

- ①生徒に選択の自由をもたせる。自律性を高める指導・支援の中で生徒の表現意欲を高められるよう、学習内容については生徒の選択に任せる。ただし、過去の生徒たちのノートや取組の工夫を閲覧できるようにファイルを用意し、生徒が自分に合っていそうな取組や学習方法を参考にできるよう支援する。
- ②長期休業などまとまった家庭学習時間が確保できる時は、学習目標の設定とその目標に対する振り返りを書かせることで、学習に対する自己調整力を身に付けていけるよう支援する。
- ③学習方法や工夫の共有の場を設ける。定期的に生徒同士で互いのノートを閲覧したり学習内容や方法について話し合わせたりすることで、生徒同士で学習方略や学習方法の多様性について学び合うことができるよう支援する。
- ④英語通信を月に1～2度程度発行し、より効果的な取組について他の生徒のノートのコピーを共有したり、その取組の効果やねらいなどについて解説したりすることで、生徒の意識が学習内容や方略の多様さからより効果的な方略や学習内容の選択に向かうことができるよう支援する。
- ⑤生徒が学習方略や自分自身の学習スタイルへの理解を深めるとともに、高1から高3へと教師の指示や取組の条件などをなくしていく。

《長期休業前の生徒への指示の例》

- ・高1の7月：ノート10ページ以上取り組むこと。ただし、選択肢として設定した5つのコース学習から1つを選択して行うこと。また、夏休みの英語学習の目標をノートの最初に記入し、日々の英語学習の取組内容・時間・振り返りを記入する学習記録表をノートに添付して提出すること。
- ・高2の12月：ページ数は問わない。TED Talks から1本映像を視聴してその要約と感想を書くライティングを必ず入れること。
- ・高2の3月：提出は問わない。これまで学習した英語学習の方法や個人の英語学習の目標や課題に合わせて取り組むこと。希望があれば書かれた意

見文などのライティングについては添削を行うのでその際は提出してください。

⑥書かれたライティングについては、原則として肯定証拠²⁰を残し、概ね1～2学年程度前の既習事項であり、意味の理解に支障をきたす誤りについては日本語でコメントつける。また、内容については、英語でコメントを行うことでwritten interaction（書くことによるやり取り）を行い、生徒の意欲を高められるよう支援する。

<生徒の自学ノートの取組例1（2017年度高1生の冬の家学習）>

9

→ Great idea!!!

12/26 政経のしよメ英語 ver. 兼用ノートの課題を解決できる
ビジネスモデルを考へよう

We payed attention to

THE RAILROAD INDUSTRY

[1. subject]

In other words
The issue is to secure comfort for every passenger

* The railroad business is an oligopoly market, they don't have problems about profit or management.

[2. countermeasure]

Build secondary infrastructure which means the pursuit of comfort unique to train.
The provision of service, equipment combined with informatics

we propose
To develop "Mamoru" = (Traffic IC card with a buzzer function)

((system))
By developing the sticker which can connect to train by Bluetooth people need will be able riding a buzzer in a train.

[3. efficacy]

⊗ Deterrence of groping

- by carrying traffic IC card, people always have a buzzer and they can use it anytime by linking computers to this system they can analyze groping and will be useful for entertainment

⊗ rescue measures

- When people feel sick in the train they can quickly to let others know their situation. They don't need emergency stop, so delay will be prevented.

Mamoru can support using trains comfortably!

10

祝! 三日お休みな!! You made it!!!

12/27 英検 (1A7 ~ 6/8)

504 ensure 確保する
505 adverse 有害な
512 turmoil 混乱
520 as a tribute to 敬意を表して
521 turbulence 乱気流
522 terrain 地形
524 revolt 反乱
525 exertion 労力
545 excerpt 抜粋
549 convey 伝える
555 tranquil 穏やかな
558 diverse 多様な
559 botanical 植物学
561 burn off 消費する
567 majestic 雄偉な
574 weary 疲れた
587 filthy 汚い
589 catastrophe 大惨事
593 authentic 本物の
596 devastate 壊滅させる
598 confidential 機密の
599 bankrupt 破産した
602 inquire 尋ねる
603 valuation 評価
608 inmate 囚人
610 subsequent 続く
611 prosecution 起訴
612 retrieve 取り戻す
613 hasty 急ぎ

★
「何て言うの?」を調べてみた!

年賀状 → New Year's card	年末 → year-end
福袋 → a bag filled with random products and sold at a discount after New Year's Day	除夜の合衆 → the New Year's Eve be
年賀 → mailing	忘年会 → a year-end party
お節料理 → Japanese New Year's Cuisine	大掃除 → customary year-end cleaning
年賀会 → New Year's party	年越しそば → the soba noodle(s) eat on New Year's Eve.
お雑煮 → sweet bean-paste soup with rice cake	
一日お休み → Plans for the year should be made on New Year's Day.	

左ページには、『政治・経済』の授業の取組を英語学習に取り入れて英語でレジュメを作り直す活動を行っている。また、この生徒は海外在住経験など特別なバックグラウンドがあるわけではないが、1年時から自学ノートや授業に意欲的に取り組み、検定試験なども目標にしつつ自律的な学習スタイルを確立させ、高2の冬に英検1級に合格している。他にも、授業で学習した漢文の要約や感想を英語で書いてきたり、化学の実験の様子についての簡単なレポートを英語でまとめたりするなど、他教科の学習をうまく英語学習に取り入れる工夫が多くの生徒に見られた。

20 肯定証拠とは、伝えたい文意がうまく書けた表現や語彙・コロケーションや、効果的な論理展開などに対して波線を引いたり簡単なコメントを付けたりして、文法や語法など英語表現上適切に使用できたことを教師がフィードバックとして示すこと。

<生徒の自学ノートの取組例2 (2018年度高2時「取組例1」と同一生徒の1年後)>

TED Talks を活用し、視聴時のメモと要約・感想を英語で書いている。ページの上にはどの技能の学習に取り組んでいるかを示すタグ付けを付箋紙で行い、冬休みの学習をとおして学習方略や技能のバランスなどを振り返ることができるように工夫されている。明らかに、自律性や学習方略や内容、計画性や学習教材のレベルなどを自己調整する力の高まりがみられる。高2の冬は、ページ数の指定などはないが、この生徒は下の例にあるような質の高い取組を51ページにわたって行ってきた。こうした取組や培った能力が英字新聞記事を作成する際の下支えとなっていることは言うまでもない。

The image shows two pages of handwritten notes from a student's notebook. The left page is titled "TED その1" and discusses "Metal that breathes" by Boris Kim Sung. It includes a diagram of a building's skin with terms like "building skin", "humanlike skin", "sweat gland", and "biomimicry x heat island". The right page is titled "TED その2" and discusses "What does my head can't mean to you?" by Sherry A. Klein. It includes a diagram of "unconscious bias" and "conscious discrimination" with examples like "education gender" and "50% of women".

The image shows a page of handwritten notes titled "Summer's target". It lists goals for writing practice and listening. The writing practice section includes goals like "write 100 words per day" and "write 100 words per week". The listening section includes goals like "listen to 10 TED talks" and "listen to 10 TED talks".

<生徒の自学ノートの取組例3 (自ら目標設定を行う)>

生徒は自主的な学習を行う前に自ら目標設定をし、振り返りまで行う。「英字新聞制作プロジェクト」においても英語学習においても、達成すべきタスクの期限を設定し進捗状況を管理したり、その取組を振り返って次の取組に生かしたりする姿勢や自己調整力は欠かせない。生徒一人ひとりがこうした取組をとおして自身の学習方略や主体性、自律性を高めていくことにより、探究的な学習や協働的な活動が成立する素地を養っている。

このほかにも、生徒自身で創作した物語を1600語程度で書き上げて提出した生徒や日本の新聞記事の要約や意見を書いてきた生徒、ほぼ毎日その日に印象に残ったニュースを取り上げて数行の紹介文を約半年間にわたり自主的に続けた生徒など、書くことに関わる能力や意欲の高まりが感じられた。

こうした英語の授業や家庭学習における取組をとおして、生徒はある程度のまとまりのある英文、特に意見文や要約などを書くことに慣れてくるので、英字新聞制作の際にも効果的に効率よく活動に取り組むことができる。また、頻繁に英文を書く経験を積み重ねてきているので、普段自分が書いている意見文やエッセーなどと英字新聞記事のフォーマットやスタイルの違いを比較対照させてよりよく理解することが可能になる。

さらに、教師側のメリットとして、自学ノートを生徒の英語学習ポートフォリオとしてとらえ、家庭学習実態や、ライティングにおける生徒の典型的なエラーや言語材料の習熟の度合いを知ることができる点が挙げられる。生徒それぞれの2年間の取組の様子やライティング能力を把握したうえで英字新聞記事作成の支援を行うので、「この記事を書いている〇〇にはサジェスションを与えるだけで十分だ」「この生徒には、声をかけて個別に支援や添削が必要だ」などと、どの新聞記事作成チームに対してどの程度の支援を行えばよいか、より適切な判断をすることができた。

さらに、2017年度卒業生は、高2の12月にお茶の水女子大学准教授 David Allen 先生の協力を得て、パラグラフィティングに関する講義とワークショップを行っていただく機会を得ることができた。collaborative writing の手法を用いて生徒がペアまたはグループになり、各自で書いた英文を比較したり、協働的に1つの英文を完成させたりするなど、図表で表していることとそれに対する見解を英語で表現する方法について学習した。これは、図表を取り入れてニュースを取り上げたり協働的に英文作成を行ったりする新聞記事作成に大いに役立った。

3.3 グローバルな諸課題や名文・名スピーチに触れる機会の拡充

「2.4.2 Student 版原稿」で取り上げた英文記事の最後のパラグラフに Malala Yousafzai さんの国連でのスピーチが引用されている。生徒たちは、高2時に Malala Yousafzai、Steve Jobs、Kelly Macgonigal を扱った CD Book²¹ から1冊を選んで購入し、収録されている本人の講義や演説、対談を聞いたり、スクリプトを読んだりする家庭学習に取り組んだ。また、そこから得た情報や感想を授業中に英語で伝え合ったり、「3冊から1つ選んで後輩に進めるとすればどの人がよいか」について推薦文を書かせたりする言語活動を行ってきたことが、英字新聞記事作成にも生かされたと考えられる。さらに、前述の CD Book には収録されていない関連映像を自主的に視聴する生徒も多く、興味・関心の広がりや高まりが見られた。

英語科を含めた他教科で得た知識・技能などが探究的な学習や活動場面に行かされ

21 朝日出版社『生声 CD BOOK』のシリーズ3タイトルより選択させた。

たりその逆のケースが起きたりすることで、そうした知識・技能のより一層の高まりと思考力・判断力・表現力等の伸長が期待できる。今後も意図的・計画的な取組をとおして他教科や「総合的な探究の時間」との連携を深めていきたい。

3.4 ライティング能力の高まりの検証 (GTEC Writingの結果より)

本校では、GTEC²²を高1および高2の12月、高3の6月に受験している。高3時に英字新聞制作を始める時点での生徒のライティング能力、また、本章で取り上げた取組の効果についてGTEC Writing²³のスコアを見ておきたい。推移については、「3 英語の授業における取組」で取り上げた2017年度卒業生のデータとする。

高3生の全国平均スコアは203であり、右の度数分布表を見ると、本校生徒の平均スコアは244.7である。高2の12月の時点で高いライティング能力を有することが分かる。また、度数分布を見ると分かるように、多くの生徒がライティング能力を底上げしてきた。こうした高い力は、英字新聞記事作成に生かされ、また英字新聞記事作成をとおしてさらにその能力を高めていったと考えられる。

年度	2016		2017	
学年	高1時		高2時	
受験人数	117		116	
平均スコア	238.9		244.7	
平均CEFR-J	A2.2		B1.1	
満点	270		320	
CEFR-J(人数)	単純	累積	単純	累積
B2			1	1
B1.2	15	15	31	32
B1.1	63	78	57	89
A2.2	19	97	16	105
A2.1	14	111	8	113
A1.3	6	117	3	116

4. 成果と課題

4.1 生徒の自己評価(SGH意識調査及び『探究II』の1年間の活動振り返りシートより)

各年度ともにおおむね同様の傾向を示しているが、ここでは「3 英語の授業の取組」と同様に主に2017年度卒業生の自己評価(SGH意識調査²⁴)の結果を中心に取り上げる。

初めて「英字新聞制作プロジェクト」を行った前年度の課題として「英文記事のフォーマットで英語を書くことへの生徒の習熟」が挙げられた。したがって、英語のライティングに関する指導や十分なガイダンスを英語科の授業で行ったり、関連資料や図書館で保管期限を過ぎた新聞やトピックや書きぶりの参考になる新聞の切り抜きを教員が年に3～4回作成して配布したりするなど、英語ライティング能力の充実や新聞記事フォーマットの理解の支援に努めた。

22 GTECとはベネッセコーポレーションが開発・運営しているスコア型4技能英語検定のことである。

23 GTEC Writingでは、社会的話題などについて意見やその根拠を20分以内に英語で書かせるライティング問題が出題され、採点はトレーニングを受けたネイティブが行っている。

24 本校のSGH研究開発で伸ばしたい資質・能力に基づき2014年に独自の質問項目を設定し、筆者が原案を作成した。改良を加えて2018年度まで全学年で年2回調査を行った。詳しい調査項目や結果については、本校WEBページ「SGHについて(SGH報告書)」より参照できる。(<http://www.fz.ocha.ac.jp/fk/menu/sgh/report.html>)

＜ SGH 意識調査結果抜粋（※数値は高3生の4月→1月の回答の割合の変化を表す。） ＞

(1) まとまりのある英文を書く力について

「トピックが既知であればまとまりのある英文を書ける」という項目で「だいたいできる・できることもある」と答えた生徒の割合：47.0% → 62.2% (+15.2%)

(2) 成果発信への意欲の高まりについて

「英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝えたい」という項目で「大変・ややそう思う」生徒の割合：89.0% → 94.6% (全学年で唯一9割を超えた)

(3) 英語で議論する力について

「既習の話題や経験の範囲内なら抽象的でも英語で議論できる」という項目で「だいたい・できることもある」と答えた生徒の割合：39.5% → 54.0% (+14.5%)

(4) 英語でプレゼンを行ったり質疑応答したりする力について

「事前に用意された英語のプレゼンテーションを流ちょうに行え、質問にも対応できる」という項目で「だいたい・できることもある」と答えた生徒の割合：31.1% → 43.2% (+12.1%)

英字新聞作成をとおして成果発信の意欲を高め、英語で表現することに自信をもち、英語で話すこと・書くことに対する自己評価が高くなっていることが分かる。教育課程編成の都合上、本校では、高3時に全員履修として一斉クラスで行う英語科の科目がない。『探究II』が上記の学年全体としての結果に良い影響を与えたと考えられる。また、高2時までの英語科の授業における取組や支援も、生徒が大きな抵抗感を持たずに新聞記事作成に取り組めた要因となっていると考える。

次に、入学時から卒業時の自己評価の推移について、英字新聞制作プロジェクトに関わって肯定的な回答の割合が顕著に増えた²⁵項目を以下に3点挙げたい。数値は、2017年度卒業生のSGH意識調査の高1第1回（5月）と高3第2回（1月）の変化を示す。

＜ 3年間で自己評価の肯定的な回答の割合が顕著に増えた3項目 ＞

質問項目	高1の5月	高3の1月
①「探究成果や解決策の提案、意見などを効果的に聴き手に伝えられる」	55.4%	71.2%(+15.8%)
②「学んだトピックや経験の範囲なら抽象的でも英語で議論ができる」	16.7%	54.0%(+37.3%)
③「そのトピックについて知っていればまとまりのある英文を書ける」	28.3%	62.2%(+33.9%)

*①は、「大変そう思う」+「そう思う」の割合。②・③は「だいたいできる」+「できることもある」の割合。

25 パーセンテージで15ポイント以上増加した項目を「顕著に増えた」とした。

①「探究成果や解決策の提案、意見などを効果的に聴き手に伝えられる」については、当該年度の卒業生はSGHカリキュラムが整備されて入学してきた最初の学年でもあり、『探究Ⅰ・Ⅱ』や教科の授業などさまざまな場面で言語活動を充実させてきた成果であると考えられる。②「学んだトピックや経験の範囲なら抽象的でも英語で議論ができる」については、英語科の授業などにおいて、技能総合型の言語活動を積み重ねてきた成果であると考えられる。また、③「そのトピックについて知っていればまとまりのある英文を書ける」については、『探究Ⅱ』で「英字新聞制作プロジェクト」や英語の授業や自学ノートなどをとおして生徒がまとまりのある英文を自発的に書くことに慣れ親しみ、パラグラフライティングに習熟してきた成果であると考えられる。今後は英字新聞以外のフォーマットで英文を書く活動も取り入れ、さらに多様な英文のスタイルに習熟させたい。

最後に、既習知識・技能の活用や、協働性・主体性の大切さについての気づき、自己の取組を振り返る力の高まりについて、1年間の『探究Ⅱ』の活動の振り返りシートに書かれた生徒の具体的な記述を見ておきたい。協働性や既習知識・他教科の学習との関連についてメタ的に捉えていることがうかがえる。

<取組全般に関わる生徒の自己評価より（※生徒の原文そのままを一部抜粋）>

- ・チームの中で少しでも役に立つことをしようと思いながら活動したら、苦手な英語を使っただけの活動もそこまで苦じゃなかった。
- ・最終的には私なりに良いものが出来上がったのではないかと自負しています。思いのほかメンバーの皆が協力的で初めに立てた計画から大きく外れることもなかったことです。他チームの記事や他



初年度の取組の課題を改善し、新聞記事作成前に各自の『探究Ⅰ』の成果について情報共有を行う目的で2年時の探究成果を高3の4月に全員が英語で報告した。

クラスにも負けていないと思います。

- ・記事を実際に作成する前にチーム内での理解を深め、伝える要点を確認し、出来上がり後の理想形を全員が共有することが記事作成の際のポイントだと思いました。
- ・2年生の時の『探究Ⅰ』や1年次の『情報』で学んだことを生かし、信頼できる情報を収集し、論理的な文章を書き上げるということはよくできたと思う。
- ・各自の分担をきっちりやってチームでは議論や軌道修正、改善をするという姿勢で臨むとグループ作業はうまく行く。

4.2 英字新聞甲子園の結果

制作した各クラス（3紙）の新聞²⁶は英字新聞甲子園に出品している。結果は以下のとおりである。回数を重ねるごとに過去の新聞制作の課題や改善点を踏まえ、また、先輩の制作した新聞を参考に新聞制作を進められるようになってきており、その成果が結果につながっていると考えられる。

- ・2016年度 第1回英字新聞甲子園 Foreign Media Prize 受賞
- ・2017年度 第2回英字新聞甲子園 準優勝1紙
- ・2018年度 第3回英字新聞甲子園 優勝1紙、準優勝1紙

5. おわりに（もし『探究II』を発展させるとしたら…）

英字新聞制作を3年間の英語学習および探究的な学習やPBLなどの学習活動のアウトプットの1つとしてとらえた場合に、どのような可能性が考えられるだろうか。現実的な制約や実現可能性をあえて考慮せず、この3年間の取組の成果を最大化するための教科横断的私案を述べ、まとめにかえる。

高2生の『英語表現II』（『論理表現II』2単位）および「総合的な探究の時間」（『探究I』1単位）の3学期を英字新聞制作プロジェクトに充て、英字新聞制作を開始する。また、高3時は、従来の『探究II』に相当する1単位時間に加え、引き続き『英語表現II』（『論理表現II』）の2単位を英字新聞制作に充当する。その結果、制作自体を高3の1学期で終了し、制作後の活動を2学期に十分に行えるようになる。

具体的には、2学期冒頭より『英語表現II』では、Student版（自作原稿）とProfessional版（GEICによる校正原稿）を比較し、英文の構成や語彙、スタイルによる表現方法の違いを振り返り、制作した新聞の自己評価を行う。さらに、新聞制作全体や個々の記事に関して学級を横断してプレゼンを行ったり、外部より留学生（お茶の水女子大学の留学生など）を招聘したりするなどして、記事で扱った問題やテーマについてディスカッションを行う。2学期末には、次年度に英字新聞制作を行う2年生へのガイダンスを兼ねて代表チームや編集部が英語でプレゼンを行う。

一方、『探究II』では、これまでの探究全体を振り返るとともに（自己評価）、自分たちが取り上げたテーマや記事の内容に関連する新聞記事やニュース、論文などを海外のサイトや過去の大学入試の英文から探し、それらを読む活動を2学期末まで行う。読後に要点を日本語や英語で書いてまとめる活動を行い、より深い内容や専門知識・語彙の理解を促す。

「大学入試」（入試改革により大学入試もだいぶ様変わりしたが）を言い訳に何十年も変わらない「受験英語」指導や学習指導要領を無視した瑣末な文法項目の暗記や演習、難解で例外的な英文構造の解釈に終始する授業や学習に比べれば、「確かな基礎

26 各クラスで制作した過去3年間の新聞については、以下のWEBサイトより参照可能。

(<http://www.fz.ocha.ac.jp/fk/menu/school/search.html>)

学力と広い教養」²⁷そして「4技能のバランスの取れたより高い英語力」を身に付ける1つの案として効果的ではないだろうか。

「英字新聞制作プロジェクト」は真正な言語活動を保証し、ゴールやタスク、その基準が明確である。これは、英語科の指導や言語活動をデザインする際にも大変重要である。また、小規模校（学年3クラス120名）のスケールメリットを生かし、生徒の自主性・自律性を重んじる校風ともマッチングした取組として成果を上げてきたが、できるだけ上級学年で実施することにより既習の知識・技能や主体性、協働性などの資質、学校行事等の経験、他教科の学習成果を生かした取組としてこのような探究的な学習を取り入れることができた。広く「総合的な探究の時間」や英語科の指導においても有効であると考えている。

『探究Ⅱ』に限らず、探究的な学習や活動は多くのサポートやノウハウの蓄積を必要とする。「英字新聞制作プロジェクトを活用した探究成果の発信」を共に作り上げた先生方や関係の方々、そして生徒たちに感謝したい。また、SGH 研究開発の指定は終了したが、2019年度も英字新聞制作プロジェクトは続く。「探究的な活動を行うこと」自体を目的化することなく、身に付けるべき知識・技能の定着に効果的であったか、思考力・判断力・表現力等や主体的に学習する態度を高めるうえで有効であったか、絶えず生徒の実態をよく見て検証していきたい。そして、この研究開発から本校の教育活動のどこに何を残せるかを「英字新聞制作プロジェクト」の担当者として、また、「主体的・対話的で深い学び」を促す技能統合型の言語活動をより多くの学校の英語の授業で成立させるにはどうしたらよいかを英語教師として引き続き考え、発信していきたい。

27 本校のSGH研究開発の目標の1つとして「確かな基礎学力と広い教養を身につけ、グローバルな社会の諸課題に高い関心を持つ生徒」を育成するとしている。詳しくは、本校WEBページ「SGHについて（本校のSGH概要）」を参照。

（<http://www.fz.ocha.ac.jp/fk/menu/sgh/outline.html>）

【別表1】『探究II』マスタールーブリック

- ・本ルーブリックは、年間指導計画の評価の観点能力記述文で具体化したものである。
指導や活動の際の目的や目標の目線合わせを行ったり、指導計画を見直したりする際に用いる。
- ・評価場面における具体的な評価基準については、このマスタールーブリックを基に作成する。
- ・評価の観点は、以下のとおりである。（具体的な評価場面は、「年間シラバス」を参照。）
①「批判的思考力」 ②「協働的思考力」 ③「創造的思考力」
- ・外部指標による客観的評価と連動させるため、ルーブリックを作成する際には、GPSアカデミックテストの「CAN-DOリスト」を参照する。
- ・最終的な評価（通知表・要録）は、生徒個別に文章で記述する。
- ・生徒の具体的な活動場面、成果物等を基に、ルーブリックを随時修正する。（年間2回をめやす）

	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力
	情報の抽出や吟味	他者との共通点・違いの理解	情報・知識の関連付け
	論理的表現	人との関わり・集団への主体性	問題把握と具体的解決
S	<ul style="list-style-type: none"> □ 記事や編集の目的に応じて、探究Iや他教科で使用した資料を探し出し、情報を取り出すことができる。 □ 情報の背景や読み手の立場を踏まえて内容の正しさを適切に判断できる。 □ 資料や既習の知識・技能を活用して、読み手を意識した説得力のある記事を作成することができる。 □ 新聞編集や記事紹介を行う際に、主張とその根拠を具体的に示しながら表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 異なる文化圏における信念や価値観の違いを理解するとともに、集団で取り組む際の個々の生徒の強みを生かし、弱みに配慮した取組ができる。 □ 記事間、又は記事作成チーム内の違いを認めつつ、アイデアを集約・洗練・修正などして建設的に合意形成できる。 □ 記事作成、新聞編集の際に主体的に集団に関わり、他者と刺激し合いながら解決策を検討できる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 既習の知識・技能・経験等を組み合わせて解決すべき問題を特定し、複数の解決策を提案・比較検証したうえで、最善の解決策を選択できる。 □ 記事の基となる情報や背景を踏まえるとともに、他の問題解決に際してそれまで問題解決のプロセスや解決策を応用できる。 □ 見通しをもって同時に複数の問題の解決に当たることができ、他のチームや他クラスの取組も参考に効果的で実現可能性の高い解決策を提案することができる。
A	<ul style="list-style-type: none"> □ 探究Iや配布された資料から、目的に応じて情報を取り出すことができる。 □ 情報の正しさを客観的に判断できる。 □ これまでの資料を踏まえて、又は指示や支援があれば既習の知識や技能を活用して、読み手を意識した記事を作成することができる。 □ 新聞編集や記事紹介を行う際に、主張とその根拠を示して表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 異なる文化圏における信念や価値観の違いを理解し、集団で取り組む際に個々の生徒の強みを生かした取組ができる。 □ 記事間、又は記事作成チーム内の違いを認めつつ、アイデアを集約・修正して、一定の条件下で建設的に合意形成できる。 □ 記事作成、新聞編集の際に主体的に集団に関わり、アイデアを出し合いながら解決策を検討できる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 既習の知識や資料を基に解決すべき問題を特定し、複数の解決策を提案・比較検証したうえで、よりよい解決策を選択できる。 □ 他の問題解決に際してそれまで問題解決のプロセスや解決策を振り返り、応用できないか検討することができる。 □ 同時に複数の問題の解決に当たることができ、他のチームの取組も時に参考に効果的な解決策を提案することができる。
B	<ul style="list-style-type: none"> □ 編集部や教師の指示や支援があれば、情報を取り出すことができる。 □ 情報を分類・区別して評価できる。 □ これまでの資料を踏まえて、読み手を意識した記事を作成することができる。 □ 新聞編集や記事紹介を行う際に、主張とその根拠を示して表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 異なる文化圏における価値観の違いを理解し、集団で取り組む際に生徒間で協力して取り組むことができる。 □ 記事間、又は記事作成チーム内の違いを認めつつ、アイデアを集約・修正して、一定の条件下で建設的に合意形成できる。 □ 記事作成、新聞編集の際に集団に協力し、他者とともにアイデアを出し合うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 一定の条件に従って、解決すべき問題を特定し、複数の解決策の中から自分たちなりの解決策を選択できる。 □ 教師や編集部の支援を受けて、他の問題解決に際してそれまでの問題解決策を振り返り、解決策が適切か、検討することができる。 □ 教師や編集部の支援を受けて、複数の問題の解決に当たることができ、解決策を提案することができる。
C	<ul style="list-style-type: none"> □ 指導や支援に従って情報を取り出したり、評価したりすることができる。 □ 何らかの主張や根拠を表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 異なる文化圏における信念や価値観、生徒間の考え方の違いを理解することができる。 □ 指導や支援に基づいて、アイデアを修正して、一定の条件下で合意形成に参加できる。 □ 記事作成、新聞編集の際に集団の活動に指導や支援があれば協力できる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 指導や支援に従って、解決すべき問題を特定し、自分たちなりの解決策を選択できる。 □ 教師や編集部の支援を受けて、解決策が適切か、検討することができる。 □ 教師や編集部の支援を受けて、問題の解決に当たることができ、解決策を提案することができる。
D	<ul style="list-style-type: none"> □ 指導や支援があっても情報を取り出したり、評価したりすることができないことが多い。 □ 表現することができない、又は評価外。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 異なる文化圏における信念や価値観、生徒間の考え方の違いを理解したり、アイデアを修正したり、集団の活動に協力したりすることの必要性は理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 自分なりの観点で何らかの解決策を選択したり、他者の提案に同意したりすることができる。 □ 具体策を見い出せない、又は評価外。

【別表2】『探究II』年間シラバス

4月の計画に入っているが、『探究II』のガイダンスは高2の学年末、3月に実施している。この際に、『探究I』の成果の要旨を英語で書いてくることが課題として出され、その共有を行うところから4月の『探究II』の授業が開始する。

■年間活動スケジュール案

注1 「評価の観点」の①～③の内容は次のとおりである。①批判的思考力 ②協働的思考力 ③創造的思考力

評価対象は、英字新聞・記事、ノート・授業中の取組の様子、自己・相互評価シートとする。

注2 「評価の観点」の記号のうち、◎は最重要項目、○は重要項目であることを示す。

月	単元名と単元のねらい	活動	主な学習活動とねらい（活動目標）	評価の観点		
				①	②	③
4	◇講座ガイダンス	○クラス別ガイダンス ○小グループでの話し合い ○クラス全体での共有	・春休み前のガイダンス、春休みの課題（探究Iの英文アブストラクト）を小グループで共有する。（英文の評価と日本語の説明） ・教師の説明を聞き、『探究II』の取組のねらいを理解する。 ・過年度の「総合的な学習の時間」の取組について、成果と課題を共有する。	5		4
5	◇チーム（記事を書く記者グループ）を決めよう	○小グループでの協議 ○テキストを用いた学習（新聞記事の種類と目的）	・編集部を編成し、クラスごとに生徒が主体的に取り組めるような組織作りとガイダンスを行う。 ・新聞の書き手としての視点や読み手を意識して新聞の大テーマを話し合い、新聞づくりの目的を共有する。 ・新聞記事の種類や必要な視点について理解する。	○	5	
6	◇取材・情報収集を行い、記事原稿を仕上げよう	<1チーム3～5人で活動> ○過去の総合的な学習の時間や教科の学習で作成したレポートや論文、資料の見直し ○必要な資料や図表、データの洗い出し ○新たに必要な取材先やデータ収集方法の確認・企画立案 ○編集部との記事内容や取材方針のすり合わせ	・動画やテキストを用いて、取材方法や英文による記事の書き方について理解する。 ・各チームと連携し、コミュニケーションを図りながら、記事の重複や方向性について検討を重ねることができる。 ・編集部は、各チームの記事や設定した大テーマと記事の関連など、全体を見通した立場や視点から各チームにアドバイスをしたり必要な作業を促したりすることができる。 ・チーム内で記事の内容や表現の仕方、データや資料の客観性などについて検討し、記事を書くことができる。 ・フィールドワークのアゴ取りや実験、校外学習時の外部機関への対応などの既習の知識や技能を活用し、必要に応じた取材や調査を行うことができる。	○		5
7	◇紙面割を決めよう	○ここまでの取組に関する自己・相互評価 ○クラスごとに編集部原案に対して意見を出し合い、紙面割を確定 ○紙面割を基に、記事の推敲・再編集計画の立案	・チームとしての取組やチーム内のメンバーの取組について、示された観点を基に自己・相互評価をして、改善点を見出すことができる。 ・自チームの記事と新聞全体のバランスの両方を考慮した上で、新聞紙面割確定というゴールの達成のために建設的に議論をすることができる。 ・これまでの取組の成果と課題から効果的なチームの業務計画（夏休み中に進めるべき作業等について）を立案、実行することができる。	○		5
9	◇クラス新聞を発行しよう	○大テーマごと、大テーマ間、新聞紙面全体など、様々な視点やグループ形態による新聞紙面や記事の最終推敲 ○新聞全体の読み合わせ ○The Japan Times編集部（GEIC）との紙面校正のやりとり	・異なる集団や形態でも目的を理解し、目標を達成するために協働的に他者に関わって課題を解決することができる。 ・英語科で学習したライティングや既習知識を活用して、新聞の推敲をすることができる。 ・必要な内容や改善点、要望などをメールや電話、直接の交渉などの場面に応じたコミュニケーションスキルやマナーを用いて伝えることができる。 ・編集部としてリーダーシップを発揮し、各チームをまとめ、1つの新聞を期日までに完成させることができる。	5		○
10	◇記者解説を聞いて新聞を読み合おう	○記事を担当したチーム（記者）による記事作成の意図や伝えきれなかった情報について英語で行うプレゼンテーション ○他クラスの新聞の鑑賞	・英字新聞の外部コンテストに応募する（予定）。 ・プレゼンテーションソフトやフリップを活用して各チームで英語で要点や作成の背景、補足的な情報を英語で伝えることができる。（聞き手として留学生や大学生など高校生以外を対象に発表できる機会があるとよい。※検討中） ・プレゼンテーションを聞いたり記事を読んだりして、記者に対して端的に英語で質問や感想を伝えることができる。 ・プレゼンテーションや新聞全体の出来について、自己・相互評価を行う。			○ 5
11	◇新聞作成のプロセスを振り返り、作成のコツをまとめよう	○次年度の後輩に向けて、作成プロセスを振り返って作業やチームワーク、クラス全体の協働的な取組を行う上でのポイントをまとめる作業	・これまでの新聞作成プロジェクトのプロセスで残した資料や記録を基に、作成の際のポイントとなる事柄をチームや個人、編集部やクラス全体などの複数の視点から端的にまとめることができる。	○		5
12	◇探究IIの取組をまとめ、自己評価を行おう	○自己評価と活動後レポートの作成（個人）	・新聞作成で得られたものや気付いたことなどを、「コミュニケーション」、「論理的・批判的な思考」、「ジャーナリズム」、「英字新聞」などのキーワードを基に振り返り、活動後レポート（A4版1枚程度）にまとめることができる。	5		○

備考 ・主担当教員が、活動案や全体のカリキュラムデザイン、編集部長（各クラスに編集部を編成）の生徒への主な指導・指示を行う。
・各クラスに1名の担当教員が付き、活動の支援や編集部への指導を行う。

参考文献

- 1) Hattie, J.A.C.(2008) *VISIBLE LEARNING:A Synthesis of Over 800 Meta-Analysis Relating to Achievement*. London:Routledge
- 2) 国立教育政策研究所 (2016) 『資質・能力 [理論編]』、東京：東洋館出版社
- 3) 三宮真智子 (2018) 『メタ認知で〈学ぶ力〉を高める 認知心理学が解き明かす効果的学習法』、京都：北大路書房
- 4) 染谷泰正 (2009) 『オンライン版「英文語彙難易度解析プログラム」(Word Level Checker) の概要とその応用可能性について』、青山学院大学文学部紀要
- 5) 中嶋洋一・直山木綿子・久保野雅史 (2017) 『「プロ教師」に学ぶ真のアクティブ・ラーニング “脳働” 的な英語学習のすすめ』、東京：開隆堂
- 6) 中條清美・長谷川修治 (2004) 『語彙のカバー率とリーダビリティから見た大学英語入試問題の難易度』、日本大学生産工学部研究報告 B, 2004 年 6 月第 37 巻, pp. 45-55.
- 7) 文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領及び同解説外国語編・英語編』、文部科学省